



八重山吹

第一号 平成31年4月1日

4月 山吹

「ホンマモンの植物で勝負」、のスローガンで入園者増対策にまい進していたころ「源氏物語の植物を園内地図にあらわしましょう」と立案し、実行してくれたのが、当時課長の金子明雄さん(後に、第十代園長)。源氏物語千年紀(2008(平成20)年)の2年前のことでした。

源氏の植物80種以上に出会える京都府立植物園。

植物を理系のみならず文系的側面からも論じたい、とかねてから思い描いていた私は、このことが契機となり「源氏物語に登場する植物」に至りました。

情報の圧倒的に少ない時代に、100種以上もの植物を物語に登場させた紫式部。彼女の超天才的な観察眼に思いをはせ、私なりの解釈も交えつつおとどけします。

春、谷浴いの山道を歩いていると、はっとする黄色に出会うことがあります。山吹は、まわりがまだ無機質色の山の斜面下部にあって、湾曲した細い枝に黄色の花を連続して咲かせ、まるでスポットライトを浴びているかのように輝きます。紫式部は、どこかの山道でこの光景に出くわしたとき、玉鬘を思い浮かべたのでしょうか。

山吹が最初に登場するのは第5帖「若紫」。

白き衣(きぬ) 山吹などの萎(な) えたる着て走り来たる女子(をむなご)



玉川の山吹 写真提供:井手町

そのあとも着物の色目を具象化する表現の一つとして出てきます

葡萄染(えびぞ) めの織物の御衣(ぞ)、また山吹かなにぞ、いろいろみえて 第6帖「末摘花」

紅(くれなる)、紫、山吹の地のかざり織れる御小袷(こうちぎ)などを着たまへるさま

第7帖「紅葉賀」

植物としての初登場は、第21帖「少女」。

御前(おまえ) 近き前栽(せんざい)、五景、红梅、桜、藤、山吹、岩躑躅(いはつつじ)などや  
うの春のもてあそびをわざとは植ゑて

六条院春の庭に、梅や桜、藤などとともに植栽された華やかな光景が目には浮かびますが、  
京都は綴喜郡井手町の玉川が、当時から山吹の名所であったことを示す歌も登場します。

春の池や井出のかはせにかよふらん岸の山吹そこもにほへり

第28帖「野分」では、春の庭に八重山吹の咲いている様が描かれ、この花を紫式部が見ていたことにたいへん驚きました。

山吹の花びらは5枚が基本。雄しべ、雌しべが突然変異を起こして花弁化するとそれは八重咲になるので、八重山吹が自然界に存在してもなんら不思議ではないのですが、突然変異はどこにでも発生するものではないし、そう簡単には見つからないからです。山の中でそれを見つけ、庭に植えた人がすばらしい!

世界に誇る日本の園芸植物文化発生期の室町時代に、豪華な花付きの八重山吹を花材として利用するのはわかりますが、それよりかなり前に八重山吹を見つけ出し、すでに鑑賞の対象としていた紫式部の観察眼に驚くと同時に、源氏物語の持つ植物誌的な価値評価を学術的に考証する必要性もあるのでは、と感じます。

六条院夏の町の西の対(たい)に住む玉鬘は、源氏と夕霧から山吹にたとえられました。

源氏は、正月用の衣配(きぬくば)りに、明るく華やかな山吹襲(やまぶきがさね)の晴れ着をプレゼント。

**曇りなき赤きに、山吹の花の細長は、かの西の対に奉れたまふを 第22帖「玉鬘」**

台風見舞いに源氏に同行した夕霧の目には、垣間見た玉鬘は八重山吹のように美しいと映りました。

**八重山吹の咲き乱れたる盛りに露かかれる夕映(ゆふば)えぞ、ふと思ひ出でらるる**

**第28帖「野分」**

紫式部は、山吹の咲く枝をたどった株元に、玉鬘の母・夕顔の姿を重ね合わせて構想を練ったことでしょう。

[参考図書]

- |          |                 |      |       |
|----------|-----------------|------|-------|
| 阿部秋生ほか校注 | 源氏物語 新版日本古典文学全集 | 小学館  | 2017年 |
| 上坂信男     | 源氏物語 その心象心理     | 笠間選書 | 1977年 |
| 本田一泰ほか   | 花びき源氏物語         | 未刊行  | 2008年 |